https://ws.aaf.ac

建築学生ワークショップ日本国際博覧会2025

architectural workshop EXPO

参加学生募集！

応募締切

5.16

Call for entry

photo : ©Satoshi Shigeta

2025 年日本国際博覧会会場（開催予定地） 2022 年 10 月 8 日座談会時撮影

１９７０～２０２５建築の博覧会 ー 日本国際博覧会

テーマウィークとの連携をつくる

「１９７０年から２０２５年」
2025 年 日本国際博覧会会場にて 開催

万博会場について

2018 年 11 月 23 日（日本時間同 24 日未明）に 2025 年国際博覧会が大阪に決定されました。開催地は大阪市の最西端に位置する此花区の人工島・夢洲に、日本古来の伝統木造技術で建設される大屋根（リング）を中心に、最先端の建築の博覧会を目指され、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに同年 4 月 13 日～ 10 月 13 日迄の半年の期間開催されます。世界各地から多くの人たちが訪れる日本国際博覧会開催の期間に、大阪・関西のこれからの聖地ベイエリアに滞在して小さな建築の実現をいたします。

会場全体

開催

本開催は、公募した参加学生たちを 5 月 16 日（金）に選定し、10 の班に分かれて、6 月 7 日（土）に全国から大阪に集まり、現地調査を開始します。境内では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、地方で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7 月 20 日（日）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、翌日、7 月 21 日（月・祝）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

9 月 14 日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築を 10 体、万博会場内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を 1 日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

静けさの森

大屋根（リング）

学び

開催には、府内をはじめとした関西周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる 3 ヶ月。参加学生たちが万博の歴史や伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、半世紀後の未来を想像しながら建築様式に連なり、訪れる人たちの想像を膨らませる空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。

「シャインハット」（大催事場）

ウォーターワールド

大阪館

「レイガーデン」（小催事場）

Architectural Workshop EXPO 2025

開催場所　日本国際博覧会・開催会場（大阪府）

2018 年 11 月 23 日（日本時間同 24 日未明）に 2025 年国際博覧会の開催地が大阪に決定されました。大阪市の最西端に位置した此花区にある人工島に、大屋根(リング)の実現を日本古来の伝統技術で目指す、最先端の建築の博覧会と称される場です。

現地滞在スケジュール

6 月 07 日(土)
現地説明会・調査（日帰り）

7 月 20 日(日)
提案作品講評会（1 泊 2 日）

21 日(月・祝)
実施制作打ち合わせ（1 泊 2 日）

9 月 09 日(火) - 15 日(月)
合宿にて原寸制作（6 泊 7 日）

9 月 14 日(日)
公開プレゼンテーション

※ 参加申込の際に、全日程の予定を確保してからお申込みください。

6 月 28 日(土) 午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間　**2025 年 9 月 9 日（火）- 15 日（月）6 泊 7 日**

※ 合宿にて原寸制作

参加費用　実 費（宿泊費、保険代、資料費等 ¥100,000　事前徴収制）

（近隣）咲州・クインテッサホテル大阪ベイ（宿泊費 ¥15,000 程度 / 人 ×7 泊）費含む

※ 本開催に関わらない万博会場（パビリオン等）の入場チケットは含みません。
※ 現地滞在中の食費、現地までの交通費は各自・自己負担となります。
※ 開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください　**https://ws.aaf.ac**

※ 参加者募集期間　2024 年 9 月 1 日（日）～ 2025 年 5 月 16 日（金）23:59（必着）

※ 参加対象者　建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生

【参加学生】定員：60 名程度（大学院生 10 名＋参加学部生 45 名 + 運営サポーター 5 名）10 グループ を予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。

【運営サポーター】定員：5 名程度（参加・宿泊費無料　開催期間中）
学部は問いません。期間中、運営会議への全参加が必要です（リモート可・日程は応相談）。

参加予定講評者

万博会場のプロデューサーと共に、日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術 両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただきます。

公開講評

これまでの開催

伊勢神宮 2018

出雲大社 2019

東大寺 2020

明治神宮 2021

宮島 2022

上和寺 2023

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“ 今、建築の、新たな、聖地へ ” 伝えたいことを、空間として表現してください。

2025 年、世界から注目される大阪、日本国際博覧会・開催会場で、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。大屋根（リング）が日本古来の伝統技術で実現を目指され、最先端の建築の博覧会と称される未来の聖地に、世界各地から多くの人が訪れる年に、この地で共に学び新しい空間を発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、日本のナショナリティを未来へ継ぎ、創造を提案をしてくれることでしょう。

【 スケジュール 】

5 月　8 日（木）　参加説明会開催（東京大学）　石川勝
5 月 15 日（木）　参加説明会開催（京都大学）　藤本壮介
5 月 16 日（金）　23:59 必着　参加者募集締切
6 月　7 日（土）　現地説明会・調査
6 月 28 日（土）　各班エスキース（東京会場・大阪会場）
7 月 20 日（日）～ 21 日（月・祝）提案作品講評会と実施制作打合せ
　20 日（日）　提案作品講評会
　21 日（月・祝）　実施制作打合せ
7 月 22 日（火）～ 9 月 8 日（月）各班・提案作品の制作
9 月　9 日（火）～ 15 日（月）合宿にて原寸制作ファイナル
　9 日（火）　現地集合・資材搬入・制作段取り
　14 日（日）　公開プレゼンテーション
　15 日（月）　撤去・清掃・解散

会場全体

リング上部

【 制作内容 】

“ 今、建築の、新たな、聖地へ “ ～ 50 年後の未来開催のために建築ができること
“ 唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください ”

・フォリー（原寸模型）を地域産材(自然素材：木材、和紙、土、石など)の材料で制作
・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

Architectural Workshop EXPO 2025

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は 2025 年、9/9（火）- 9/15（月）に日本国際博覧会・開催会場にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される建築家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチュアしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

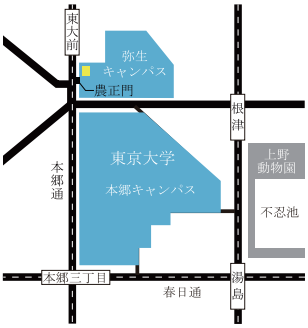
東京会場

東京大学（弥生キャンパス）
農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩 3 分
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩 10 分

5 月 8 日｜木｜17:30 - 19:00（17:00 開場）

入場無料｜定員：先着 100 名｜要申込　※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認の上ご来場ください。



基調講演　石川勝（大阪・関西万博会場運営プロデューサー）

1963 年札幌市生まれ。プランナー として博覧会や展示会を数多く手掛ける。2005 年愛知万博ではチーフプロデューサー補佐として基本計画、ロボットプロジェクト、極小 IC 入場券等をプロデュース。ロボット技術、コンテンツ技術に専門性を持ち、2006 年から 10 年間、東京大学 IRT 研究機構で産学連携事業に従事。経済産業省「今年のロボット大賞」事務局長、「技術戦略マップ（コンテンツ分野）」委員等を歴任。

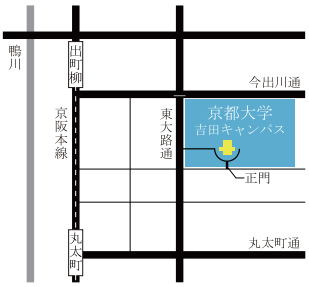
京都会場

京都大学（吉田キャンパス）
百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩 10 分
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩 10 分

5 月 15 日｜木｜18:30 - 20:00（18:00 開場）

入場無料｜定員：先着 100 名｜要申込　※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認の上ご来場ください。



基調講演　藤本壮介（建築家）

1971 年北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000 年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014 年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・ブラン）に続き、2015、2017、2018 年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。2019 年には津田塾大学小平キャンパスマスタープラン策定業務のマスターアーキテクトに選定される。主な作品に、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン 2013 (2013 年)、House NA (2011 年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010 年)、House N (2008 年) 等がある。

2010 奈良・平城宮跡

2011 滋賀・竹生島

2015 和歌山・高野山

2016 奈良・明日香村

2017 滋賀・比叡山

2018 三重・伊勢神宮

2019 島根・出雲大社

2020 奈良・東大寺

2021 東京・明治神宮

2022 広島・嚴島神社

2023 京都・仁和寺

2024 京都・醍醐寺

主催　特別共催　共催　特別協賛

©AAF 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa
NPO/AAF Arts&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ　ウェブ www.aaf.ac　E メール info@aaf.ac

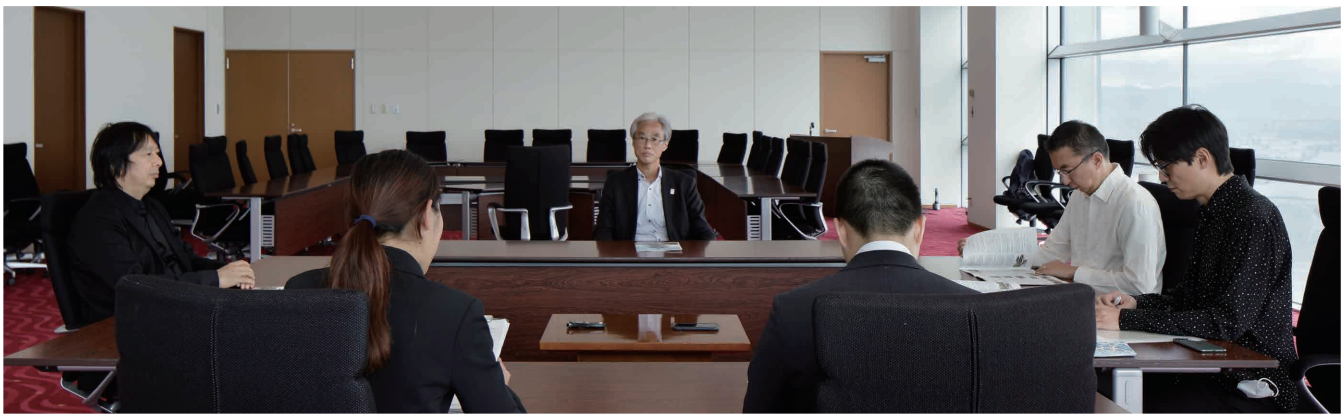
日本国際博覧会協会　文化庁　大阪府　EXPO 2025　大阪市　AGB 旭ビルウォール株式会社　住友林業　YOSHINO 吉野石膏　LIXIL

座 談 会 ｜”1970 から 2025 へ ” ～未来に受け継ぐために建築ができること
建築学生ワークショップ日本国際博覧会 2025

髙科淳（公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会 副事務総長）

× 藤本壮介（建築家｜藤本壮介建築設計事務所 主宰）× 石川勝（プランナー｜シンク・コミュニケーションズ 代表取締役）

× 平沼孝啓（建築家｜平沼孝啓建築研究所 主宰）



座談会の様子（大阪府咲洲庁舎 ２０２５年日本国際博覧会協会 にて）

――― 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移して開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地・聖地と、周辺の生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知ることのできない地域との関わりや、建築を保全していく造り方の技に触れ、制作を含めた実学のために地域滞在を行います。計画地の歴史コンテクストを繋いで見出し、現場で建築のつくり方や解き方を探るきっかけを経験していきます。また、この夢洲は、1977 年廃棄物処分地の整備が始まり、1991 年には土地造成事業が開始され、2001 年夢舞大橋が完成、2009 年夢咲トンネルが開通しました。これまで様々な利用計画が挙がりましたが造成開始当時に計画された事業はバブル崩壊で実現せず、オリンピック招致も失敗し、これまで負の遺産と称されましたが、紆余曲折を経て、ついに 2025 年大阪・関西万博の開催が決定しました。近現代における主要都市の街づくりに欠かせない島の開発と、これから最も貴重となる「聖地」に身を置き、全国から集まる建築学生らがこのあらたな地に触れ、この場に位置づける建築の解釈を生み出したいと考えています。そこでこの場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性（地形）」「現代の問題」の観点から提案に求めるものやワークショップ開催の目標となる言葉や意義について模索したいと考えております。次世代を担うであろう、建築や芸術、デザインを学ぶ学生たちが夢洲に身を置き、場の空気を体験しながら学びを得ることにより、貴重な経験を通じて 2025 年・夏、小さな建築空間を表現します。空間性へのテーマや、実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、この座談会を通じてお聞かせください。

本日は開催候補地として多大なご尽力をくださいます博覧会協会にて、建築や芸術、環境やデザインを全国で学ぶ参加学生に向けて導きをくださる、髙科副事務総長をはじめ、石川勝さん、藤本壮介さんにもご参加をいただき、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます建築家の平沼先生と共に、25 年の万博会場での開催についてお聞きしたいと思います。皆さま本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平沼：まず始めに万博の全体とテーマについて、髙科さんからお話しいただけないでしょうか。

髙科：先ほど上陸してご見学いただいた「夢洲」という USJ 近くの埋め立て地で開催する予定で、2025 年 4 月より約半年の期間に来場者は約 2,800 万人を想定して開催準備を進めています。万博には「総合的な万博」と「テーマを絞った万博」の 2 種類がありますが、今回はそのうち大きな方の万博で、日本での開催は 70 年の大阪万博と 05 年の愛・地球博、これらに次いで我が国で 3 度目の開催になります。現在の準備の状況としまして、建設は 23 年 4 月の着工を目指しています。工事工区は大きく 4 工区に分け、それぞれの統括的なゼネコンが決定し、具体的な施工調整を始めるなか、藤本プロデューサーの大屋根（リング）の詳細イメージも発表させていただきました。全体のテーマは『いのち輝く 未来社会のデザイン』。テーマ事業のプロデューサーが 8 人おられ、1 つずつパビリオンをつくり、それに沿う「いのち」をテーマにした世界感をそれぞれに作っていただく。そして藤本さんの考えておられる静けさの森も一つのエリアとして、大きなテーマを発信できると思います。テーマ事業というのは、70 年万博では岡本太郎さんの太陽の塔、愛・地球博では冷凍マンモスでしたが、それに次ぐ万博の顔となるプロジェクトです。プロデューサーの方々は、我々が存在している意味を問いかけて、気づきが生まれるような内容をそれぞれ独自の視点から考えていただいて、とてもワクワク感の高まる、魅力あるものになっていくのではないかと期待をしています。また、パビリオンだけではなくて、万博全体を未来社会のショーケースにしたいということで、これはショーケース事業

として今後まとまったものから順次発表していくことで、世の中の関心を高めていきます。海外からは、現在約 140 カ国が参加表明をいただいております。10 月 25、26 日に、IPM（インターナショナル・プランニング・ミーティング）という、各国の政府代表が初めて大阪に集まって、現場を見ていただくとともに、今後の進め方について説明し、我々とディスカッションさせていただく場がありますが、そこから海外との関係も実際にスタートすることになります。“ ミャクミャク ” というキャラクターも決まりましたので大いに活躍してもらって、万博でこんなことが見られるんだ、体験できるんだという期待も高め、全国で機運が盛り上がっていくような働きかけも加速していきたいと思います。また入場チケットは、23 年度中に前売券の販売を開始したいと考えていますが、前売券を発売するからには、やはり魅力あるものにして、色々な PR を行って、全国での機運を高めていきたいと思っています。

平沼：石川さんは愛・地球博にも関わられたと思いますが、万博は本当に必要かという声があります。若い層には特に盛り上がってほしいなと思っているのですが、どういうメッセージを伝えたら良いでしょうか？

石川：万博と建築の話に少し触れておくと、第一回の万博は 1851 年にロンドンのハイド・パークを会場に、ヴィクトリア女王のご主人のアルバート公という人が率いて始められました。そこにクリスタルパレスという大きな水晶宮があったんですね。当時 19 世紀でまだまだ石とレンガの建築の時代だったところに、鉄とガラスの建築、それも大空間をつくるというのは画期的なことで、やっぱり万博と建築というのは切っても切れない関係性にあるのです。クリスタルパレスをつくったのは、実は建築家ではなくて造園家なんです。その方が温室の技術を使ってクリスタルパレスをつくったということを見ても、万博は常に新しい建築技術、新しいデザインの実験場だったことが窺えます。その後もたくさん万博が行われてきましたが、例えばグラン・パレとかプティ・パレ、エッフェル塔など、パリにある主要な建物は全て万博をきっかけにできています。その当時の新しい建築技術がそこで実験的につくられて世の中に出てきて、その後の街のスタンダードになっているということです。ですからこういう新しい建築の取り組みが過去の万博で見られてきた歴史があって、今回の大阪・関西万博でも藤本さんをはじめとする建築家の作品が見られることになります。愛・地球博の外国のパビリオンではモジュール形式と言って、主催者である日本側がモジュール建築を建てて、そこに外装を張り付けてやるという構造でした。今回の大阪・関西万博の敷地を渡して各国が自由に建築をつくるセルフビルド方式は’ 70 年万博以来で、日本では 50 年ぶりです。ミラノやドバイなどの万博でもセルフビルド方式でしたので、各国が工夫を凝らした意匠や、構造的にもすごくチャレンジングなものが見られました。日本でそんな面白いことができる機会は建築を志す皆さんにとっては千載一遇のチャンスの場だと思いますね。万博はオリンピックと一緒で本当は参加することに意義があります。建築や周辺分野を目指している皆さんは万博にプレイヤーの一員として関わっていただけると、すごく良いと思います。振り返ると、丹下健三さんを筆頭に偉大な建築家たちは皆、万博で世の中に出てきているわけですね。若手建築家に小さな建築をつくってもらうことも一つの

髙科淳
（２０２５年日本国際博覧会協会副事務総長）

平沼孝啓
（建築家｜平沼孝啓建築研究所主宰）

試みだし、建築だけではなくて、これからいろんなパビリオンでいろんなプランニングをしますから、そういうところに参加したり、自分たちの活動を「TEAM EXPO2025」として万博を通じて発信したり、会場の中での運営に携わりたいならスタッフやボランティアとして入ったり、といういろんな機会があります。せっかく自分たちが生きている時に自分たちの国で万博があるわけですから、そういうチャンスを生かしてもらえればと思います。そして万博で、「建築学生ワークショップ」が開催されるのは生きている間では一度きりになるでしょうし、大いに参加してもらえればと思います。

髙科：デザイン的にはピクトグラムも大阪万博で始まったと聞きました。そういう意味では次の時代のスタンダードになるヒントがたくさん隠れているところだと思うのです。だからこそ参加したり体験してみたりするということは、若者にとって、次の時代がどんな時代になるのかを考える上でも非常に意義のあることなのではないかと思います。かつてゼネコンさんの７０年万博の記録映像を見せてもらったことがありますが、見たこともないような形状のパビリオンを、どういう技術でクリアし設計や実際の施工をするのか、建築を志す方にはめったに得られないとても良い、素晴らしい機会になるのではないかなと思いました。

平沼：生活文化を映す鏡が建築と言われます。逆に未来の生活や暮らしを予測するものが万博と捉えていけば良いのかもしれませんね。

藤本：万博では複層的に、とてもたくさんの価値観のレイヤーが入っていて、多様化した社会における特に現代の万博の特徴なのではないかと思っています。会場を設計するにあたって、「いのち」というテーマがありますが、『いのち輝く 未来社会のデザイン』というのを僕たちなりに読み替えていかないといけない。建築、会場、会場デザイン、環境デザインにおいてもこのレイヤ―が繋がるように考えていきました。いのちというのは多様なものが関係し合いながら存在します。万博は 150 カ国が集まるという時点で、文化も習慣も相当、多様です。それらが 6 ヶ月間、何らかの形で良い関係や繋がりをつくりながら共に未来を考えたり、あるいは異なる国や文化が共存していたり、新しい繋がりを見つけていくことが未来なのかもしれません。フィジカルな繋がりとは別に、時間の流れの循環もありますし、何かを受け渡してそれを他の国の人たちがどう使っていくかという意味での循環もあり得るでしょう。だからこそこの循環という価値によって生まれるサイ

クルは、これからの社会の大きなキーワードになってくると思います。そこでリングはやっぱり循環を想起させるということと、誰もが「つながり」をイメージすることができる象徴としてデザインしているんです。さらに真ん中に森を置くことで自然の循環や木々の生命としての循環も盛り込みたい。一方で各国のパビリオンでは、それぞれが持っている文化と未来へのビジョンを良い意味で競い合うような側面もあるので、その華やかな感じが万博のレイヤーだと置き換える。多様なものが集まることによって生まれるエネルギーを実際にドバイ博で見ましたが、それぞれの国がその国ならではの気候風土と、それをベースにした文化をちゃんと培っているというのが本当に感動的で、それを見るだけでも価値がある。そういう学びと未来が共存していると場はすごく良いことだと感じています。今までこの建築学生ワークショップは、ずっと、歴史のある聖地で開催してきました。文化や歴史的な背景に頼り、大いに手がかかりにすることで、逆に現代の建築や未来の建築をつくる時の豊かなインスピレーションになっていたと思います。万博はそういう意味では場所という意味でのコンテクストがないように見えるから、何となくかりそめのイベントみたいに見えるかもしれません。ですが、実はコンテクストは結構あって、先ほど石川さんもおっしゃっていたように万博というものの歴史があるし、それからこの場所は埋め立ての島ですが、周りを取り囲んでいる大阪・関西エリアは日本の歴史や国際交流の歴史にすごく根ざしている。いのちや多様性という概念をどう形づくるかを考えることも、大いなるコンテクストになるのではないかと思います。これからの時代の価値観を見出し、どう言葉にして、それをどう会場デザインなり建築なりに映し変えていくのかということをまさに今リアルタイムでやっています。でもそのコンテクストをそのまま引き受ける必要はなくて、それを批評的に見ても良いし、あるいはその先を考えても良い。さらに突っ込んでコンテクストなり今の世界の状況を自分たちなりに考えるプロセスは凄く価値があります。その中に持続可能な社会、それから多様なものたちが共に支えあいながら、補い合いながら共存していく社会の全体像は、2025 年には常識になっていると思います。ただそれゆえに、どう実現していくのかというところはよりリアルに問われてくるのではないか。若い世代の発想力とビジョンに期待したいなと思います。

平沼：素材に関してどういうサーキュレーションを起こしていこうと考えていますか？藤本さんがおっしゃった通り、デフォルトとしてこれが一つの世界的な事例になって、それ以降建築界は素材の扱い方が変わってしまうかもしれないくらいの影響力がある

藤本壮介
（建築家｜藤本壮介建築設計事務所主宰）

石川勝
（シンク・コミュニケーションズ代表取締役）

と思うのですが。

藤本：トータルの循環を考える良い機会なのではないかと思っています。元々寺社仏閣のような聖地だと、その敷地内でほぼ全ての循環が行われている場合が多い。それは理想的だと思うのですが、現代社会においては多少広がりのある領域の中で循環させることも意味があるのではないかと思います。周りが海に囲まれているのでその行先、持ってくる方法を含めた可能性はいろいろ広がりますし、今まで以上に能動的に考えていく。そして循環の意味を自分たちなりに「再定義」していくというのは凄く面白いと思います。

平沼：皆さんには宮島開催の様子を見ていただきましたが、この万博開催に参加される学生に、どんな希望や期待をされますか？また、実はこの万博の翌年の開催が奈良の法隆寺に決定しています。藤本さんがつくられるおそらく世界最新の木造建築がある場所から、世界最古の木造建築がある場所へ移ります。この比較からも、このワークショップの趣旨をより深く図りたいなとも考えています。参加する学生たちへ合わせてメッセージをいただけないでしょうか。

髙科：万博会場でいつどのような催事を開催するかはまだ何も決まっていませんが、それを前提に申し上げると、確かに万博は純粋な意味での聖地とは違うコンテクストが考えられると思います。参加される学生さんたちがまず、どのコンテクストから発想を深めてコンセプトを作るかという所から始まるのかなと思います。感じ方はそれぞれ違いますから、今回はコンテクスト自体、自分たちで一番強く感じるところから真っすぐにやっていく。未来社会へ向けた万博である以上、それは凄く面白いことになるのではないかなという気がしました。全体としては『いのち輝く 未来社会のデザイン』という、「いのち」が一つの大きなテーマがあって、その大きなテーマの中でそれぞれが強く感じたコンテクストで何かを作っていくという体験ができる、すごく貴重な機会になりそうです。

石川：建築学生ワークショップですが、日本を代表する聖地の方々が一堂に会するという機会は、めったにないと思いますので、この活動の素晴らしさに賛同して集まっておられるのだろうと思いますし、建築に対する社会の期待や建築業界が持っているアクティビティみたいなものがやはり凄いんだなと感じていました。聖地というのはお参りをして祈ったり、感謝したりする

「営み」があるから、僕たちは聖地を聖地として感じているのだと思うのですが、歴史や未来への展望も含む営みということで考えると、万博もやはりそういう構造を持っていて、世界中から万博に出すパビリオンは、今を見つめつつ、将来に向けてこうあるべきだという提案がされていて、訪れた人はそれに向き合って自分の中の内なるものを見つめ、外に対して発信していく。ですから万博会場というのは聖地に通ずるものがあるので、建築学生ワークショップの開催場所として相応しいという文脈を持つことができると思いました。翌年、26 年は法隆寺で開催するということで、世界最古の、当時の最大の木造建築の場において何らかのテーマをきっと持たれると思いますが、どうも建築業界では昔から、最初はテーマから入ったはずが、出口になると必ず意匠とか構造とか機能とか値段とかに収斂して、いつの間にかテーマがいなくなる。僕はそれがとても気になるので、折角掲げたテーマに対して手段として提案している作品がどういう意味を持つのかというところをきちんと掘り下げてもらいたいです。世界最古の木造建築と、皆がつくる作品との関連性の中で、課題やテーマに対してどのような価値があるとか、斬新だといったメッセージ性を持っているかどうかというところを問う場にして欲しいです。

平沼：ありがとうございます。その通りですね。僕も藤本さんも毎開催、伝えているつもりなのですが、だいたい無視される。なぜか聞いてくれないのです。（笑）

一同：アハハ。（笑）

石川：これこそ、日本の建築界に脈々と続いている文化でしょうね！

平沼：大阪万博が 1970 年、今回が 2025 年で、二度あることは三度あるとするならば、次の大阪万博は 55 年後の 2080 年なのかな？何となく希望と期待を持っておきたいのが大阪人の性分です（笑）。僕たちは残念ながらその頃にはこの世にいないでしょうから、このワークショップに参加する 21 世紀生まれの学生たちには、「当時こういうことがあったんだぞ〜」という事実を継いでいってもらいたいと思うのです。ワークショップでは藤本さんの会場コンセプトをきちんと読み取り会場を見て建築に寄せて提案をする人、逆に対峙したいと挑戦してくる人が出てくると思いますが、55 年後に万博があればその経験を活かしてチャレンジしてくれる人がその頃に出てきたら素晴らしいなぁと思うのです。恐らくどうしても僕たちでは直接、継げませんから、その人たちに継いでもらわないといけません。藤本さん、参加して挑戦してくる学生たちへメッセージをお願いします！

藤本：わぁ、むずかしいね（笑）。僕たちも今の信念の元にやってはいますが、それが正しいかもわからないし、50 年も経つと世の中がガラッと変わるでしょう。例えば’70 年万博の時には文明社会、機械、素晴らしい人工物の祭典として行われましたが、今回は自然環境やいのちがテーマです。しかし’70 年に丹下さんをはじめ、建築だけではなく様々な将来を夢見たことが、今光り輝いていることは確かなんですね。それはまさに脈々と受け継がれていく中で徹底的にやり切ったことによって、それを引き継ぐ人もいれば、良い意味でポジティブに異議を唱える人もいるし、新しい価値観を打ち出す人もいる。「やり切ったこと」で、それが生み出す様々な反応がまた次の世代のクリエーションなりビジョンをつくっていくことは素晴らしいと思っています。そもそも僕たちは、100 年前くらいに起こったモダニズムの動きを今も見返しながらその先を考えたりしている。「どんな小さな一歩でも未来に投げかけることはできる」のではないか。それらが多様なものと合わさって、本当の大きな未来像みたいなものとして緩やかに現れてくる。小さな一歩でも良いし、あるいは大きなストーリーを引き継ぎつつ、「その人なりの未来をつくっていく作業をずっと続けていきたい」と思ってもらいたいです。思いもよらない価値観に出会い、どんどん変化していって、それがずっと続いていくということ自体が、僕は素晴らしい出来事ではないかなと思います。

平沼：ありがとうございます！参加してくる学生の皆さんを、楽しみにお待ちしています。

――― 大変貴重なお話をお伺いできました。本日はどうもありがとうございました。後進で建築や環境、美術やデザインを学ぶ参加学生にとって、とても貴重で意義深い開催になるような気がします。将来、この場所で開催した意義を継いでいく提案作品を募りたいと思います。

（令和４年 10 月８日
大阪府咲洲庁舎 43 階　２０２５年日本国際博覧会協会にて）

編集後記

今も歴史環境を感じる貴重な聖地を読む経験も、建築空間で自らの表現と制作する体験と、令和の日本を代表する建築家や構造家、全国の大学で教鞭を執られる先生方の厳しくも愛のある指導を受けることも、生涯の記憶に残るような幸運であったと想い返すことになる、貴重な機会となります。この大切な記憶がまたひとつ増えるような取り組みに、深く感謝をしています。

聞き手：杉田美咲
（AAF｜建築学生ワークショップ 2025 運営統括）

2025 年日本国際博覧会会場 敷地にて